日本における「社会的キリスト教」の胎動

――中島重と賀川豊彦の出会いをめぐって――

倉橋克人

はじめに

日本社会は、一九二〇年代末から急速にファシズム体制の中に傾斜していった。そして、一九三一年九月の「満州事変」の勃発を機に戦時体制に突入して、三三年三月に日本が国際連盟から脱退して、国際的に孤立化の道を辿っていったことは、周知の通りである。日本のキリスト教界も、そうした時局の流れに追随して、天皇制国家によって策動された国民精神作興運動の一翼を担って、国策迎合の道を歩んでいった。[1] そのことは、三七年一〇月に結成された国民精神総動員中央連盟に加盟した七四団体の中に、宗教関係としては日本基督教連盟が、全国神職会、神道教派連合会、仏教連合会などとともに加わったことにも示されている。こうした天皇制国家による各宗教団体に対する包摂と統制の動きが、翌三八年四月に公布された国家総動員法のもとで成立した宗教団体法（公布は、一九四〇年四月八日）につながり、それが、四一年五月の大日本宗教報国会の結成、同年一二月の日本政府の米英に対する宣戦布告を受けて結成された大日本戦時宗教報国会や宗教団体戦時報国会の結成に到り、そうした過程で、日本におけるプロテ

スタント教会三〇余派の合同によって、四一年六月に日本基督教団が創立の運びになったことは、改めて述べるまでもない。[2]

「満州事変」が起こった翌三一年には「五・一五事件」が起こり、海軍の青年将校によって政友会の総裁であった首相の犬養毅が殺害された。この出来事によって政党政治は終焉し、その後、軍国主義が台頭していったが、そうした急激な時局の趨勢を、必ずしも、すべての日本のキリスト教徒が首肯していたわけではなかった。こうした国家社会のファシズム体制への傾斜の中で、それに抗いつつ、ともかくも、社会改造の気運の残り火をともし続けた一群の青年キリスト者たちが存在した。「学生キリスト教運動（ＳＣＭ）」がそれであり、殊に、この運動のイデオローグの一人となった中島重（しげる）が提唱した「社会的キリスト教（ＳＣＭ）」は、[3]一九三七年七月の日中戦争の突入を受けて、日本のキリスト教界が、ほぼ全面的に戦争協力の姿勢に転じてゆく中で、結局は、それに屈従してゆくまでの期間、あくまでも社会変革の可能性を信じて、その実践的な課題を追い求めていた点で、日本キリスト教史においても特筆されるべきものであった。[4]中島は、一九三四年一月の年頭に当たって、次のような悲愴な決意を吐露している。

（前略）復古主義、国粋主義、独裁政治、計画経済、政党ファッショ、労働団体の皇道精神化、文教ファッショ、転向又転向の裡に一九三三年日本は去つて行つた。一九三四年の社基運動は、此の風波の中を押し切つて漕ぎ進まなければならないことを覚悟しなければならない。[5]

この中島に、実践面において決定的とも言える影響を与えたのが、賀川豊彦であった。[6]中島は、賀川が掲げた社会改造の理想に深く共鳴して、自らの国家観や社会連帯思想を開陳するにあたって、彼の精神的な感化を受けていたこ

とを、自らも認めている。賀川自身は、キリスト教社会事業の活動家として、また、「神の国運動」の指導者として[7]、自己の国家観を体系的に論ずることはなかったが、一方の中島は、むしろ「神の国運動」の中で標榜された賀川の宗教的世界観を、独自の法理論や社会哲学の観点から意義づけ、それを理論的に弁証しようとしていった。その意味で、中島が展開した言論活動は、「神の国運動」の一つの発展的な性格を有するものであったと考えられなくもない。けれども、そのことは同時に、「社会的キリスト教」が持っていた思想的な制約や限界が、賀川のそれと通底していたとも言えなくもないのである。

中島重に関する先行研究は、その先駆的な働きに比べて多くはない。もとより、彼は一個の篤実な法理学者、政治学者であったから、当然のことながら、そうした分野の彼の学術的な貢献については、爾来、そうした領域における研究者たちによって論じられてきた。たとえば、戦後まもなく、中島の政治思想を日本の政治学史の中に位置づけた蝋山政直氏は、彼が提起した多元的国家論をめぐって、「近代政治学における発展とし、或は社会学における国家理念として、純学説的に研究した」ものとして、高田保馬とともに高く評価している[8]。また、中島の直接の薫陶を受けた田畑忍、嶋田啓一郎の両氏も、それぞれの観点から彼の国家論や社会改造論について論及している[9]。その後、中島の社会連帯主義を法思想の観点から論じた武邦保氏の一連の研究[10]が続き、さらに、近年になって、中島が打ち出した国家論を、「日本における多元的国家論研究の嚆矢」として位置づけた大塚桂氏の研究や、中島の憲法論を美濃部達吉との比較で学説的に論じた小野博司氏の研究など[11]、彼の政治思想が、改めて注目されるようになってきたことは、まことに喜ばしいことである。

だが、その一方で、一個のキリスト者としての中島の足跡や、彼が提唱した宗教的社会観を内在的に検討したものは、意外に限られている。わずかに、中島の生涯を辿った竹中正夫氏による評伝[12]の他に、先の嶋田、武の両氏の論文

しかなく、[13]それらにしても、日本キリスト教史の中で、彼が果たした歴史的な役割を検討しようとしたものとは、必ずしも言えない。また、現在の日本のキリスト教界でも、中島については、あまり積極的に評価されてはこなかったように思われる。その理由として考えられることは、これまでの日本のキリスト教界が示してきたキリスト教信仰と社会問題をめぐる二元論的な宣教理解[14]と、特に、一九三〇年代以降に日本に紹介されたカール・バルトをはじめとする弁証法神学（危機神学）が及ぼした、日本特有の神学思想の状況があるように思われる。[15]そのような思想的な系譜に立脚する新正統主義神学の立場からしてみれば、中島が提唱した「社会的キリスト教」の主張などは、近代主義的なオプティミスティックな歴史観に根ざすものとして、否定的に評価されざるを得ない。[16]

なるほど、そうした神学上の前提に立てば、かかる裁断的な理解も可能なのかもしれないが、それでは翻って、そうした歴史認識に立った日本のキリスト者たちが、一九二〇年代後半から三〇年代にかけての日本の社会状況の中で、いかなる思想的な展開を示し、社会的実践をなしていたのかは、別問題であろう。神学的な言説は、それが置かれた人間の具体的な状況の中で、どのように機能していたのかによって、その真理契機が問われなければならない。[17]その点で、中島たちの働きの方が、はるかに問われている問題に対して誠実に応えようとしていたのであって、キリスト者としての社会的良心を発揮していたのではないかと、筆者は考える。この小論は、その中島が、「社会的キリスト教」を提唱するに至った経緯を、特に、彼に思想的な影響を与えた賀川豊彦との関わりを軸にして明らかにしようとするものである。それは、日本における「社会的キリスト教」の胎動とも言えよう。

一　「同志社アカデミズム」の中で

最初に、中島が「社会的キリスト教」を提唱するまでの履歴を、簡単に辿っておきたい。

中島重は、一八八八年五月三日に岡山県上房郡広瀬村（現在は、高梁市）で、同村の資産家である柳井重宣の三男として生を受けた。父重宣の父親は、八十六銀行の頭取や県会議員を務めたという。中島重は、幼少時に、獣医であった中島直治郎の養子となるが、直次郎の伴侶の陽は、柳井重宣の伴侶の妹であり、二人はともに、日本組合高梁教会（創立は、一八八二年四月。現在は日本基督教団高梁教会）で受洗した熱心なクリスチャンであった。中島は、旧制高梁中学校を卒業後[18]、岡山市の第六高等学校に入学したが、そうした養父母の精神的な感化もあって、在学中の一九〇九年七月一一日に、同教会で牧師の溝口貞五郎から受洗して[19]、キリスト者としての歩みを踏み出すことになった。中島は、自分が受洗するに至った経緯をめぐって、後に、次のように振り返っている。

（前略）中学校から高等学校にかけては無茶苦茶に語学が好きで、英語と独逸語とを無茶苦茶に読み耽つた。洋行しないから会話は出来ないけれども、読む事なら相当達者にやれるのは、此の時代の語学耽溺の御陰である。二十二歳の時、洗礼を受けた、此時迄私は樗牛張りの日本主義で養父の基督教主義に対抗して仲々言ふことを聴かなかつた。不思議なことに、‥‥溝口靖夫兄のお父様が、私の郷里の高梁町の牧師で居られた。中学時代より両親も牧師も教会の先輩達も私を信仰に導かうとせられたのであるが、私は仲々強情で従はなかつた。従はなかつたのでもあるが、実はまだわからなかつたのである。遂に私は降伏した。それは私の私行上遂に日本主義が敗北したのであつた。（中略）私は此の時高等学校の二年から三年になる時であつた。私は岡山に出て居たので安部清蔵先

生に教へを乞うた。私は受洗した時から哲学をやらねばならぬと思ひ出した。[20]

受洗してからの中島は、哲学や倫理、さらには宗教の方面について、一層、興味を持つようになっていったが、そうした彼に一つの出会いが訪れる。彼が学んでいた第六高等学校に、その前年の五月に、イギリスのエジンバラで開催された会衆派の世界大会に出席するために洋行して戻ったばかりの海老名弾正が招かれたのである。この時の彼の講演は、偏狭な国家主義を退けて、普遍的な国際主義を主張するものであったというが、中島は、そうした海老名の主張に強く心を動かされた。後年になって中島は、当時の海老名について、次のように回顧している。

（前略）一九一八年聯合軍の大勝利のうちに休戦（筆者補注、第一次世界大戦のこと）なり、国際聯盟が出現するに至るや、先生は熱狂して之を迎へられたのであつた。此の時である。先生が某有力者の援助に依つて夫妻相携へて、欧洲を訪ひ、親しく、インターナショナリズムの動きを観察して来られたのは。兎に角先生は直感的洞察力に富み、判断正確であり着眼卓抜であつて、その見識は常に一世に超越して居つた。（中略）インターナショナリズムは先生が第一回の洋行後既に熱心に唱へられた所であつて、私は明治四十二年高等学校生徒のとき、学校に於てその講演を聴いたものである、そのとき先生はローヤリチーやペートリオチズムは既に最早や欧米の青年を動かす理想でなくて、彼等は今やインターナショナリズムの理想に動いて居ると言はれたのをハツキリと記憶して居る。[21]

そうして中島は、一九一〇年に第六高等学校を卒業後、東京帝国大学法科大学に進学した。大学に入学してからは

本郷教会（現在は、日本基督教団弓町本郷教会）に出席し、後に転入した。[22] 言うまでもなく、同教会の牧師は海老名であり、その頃の本郷教会は、「書生の教会」[23]と評されたように、都市圏に在住する学生たちを中心に、多くの青年層に強く訴えるものがあり、教会のオピニオン誌であった『新人』（創刊は、一九〇〇年七月）の編集と発行も、東京帝大学生の三沢糾などが当たっていた。同誌の論陣には、同じ東京帝大の学生であった内ヶ崎作三郎、吉野作造、小山東助などが加わり、彼らは、卒業後はそれぞれに、学界や政治世界で多彩な活躍をしていった。[24] 中島も、そうした教会のリベラルな空気の中で、牧師の海老名をはじめ、教会員の一人で、東京帝大法学部で教鞭をとっていた吉野などの思想的な感化と刺激を受けていたことであろう。また、中島は在学中には、南原繁、三谷隆正、片山哲といった、同信の学友たちも与えられている。けれどもやはり、彼の信仰に最も強い影響を与えたのは、海老名であった。中島は、この時期の海老名について、次のように述懐している。

> 先生は本郷教会に於て教壇から多くの青年学生を指導せられた。先生は青年のノーブル・アンビションに訴へられた。青年達は未だ嘗て先生の口から、自我の否定といふことを聞いたことがなかつた。（中略）然し私は先生から或る機会に於て、実に深刻な自己否定の体験を聞くことが出来た。（中略）先生は思ひつめ考へつめた結果すべては罪悪だと考へられた。一つ〳〵のことが皆罪悪だと考へられた。従つてその一つ〳〵を否定して行つた。最後に自己のすべてが否定せられ何も残らぬことになつて了つた。然し一つだけ罪悪でないと思はれるものが残つた。それは神を愛する愛であると考へた。此の世につけるすべてが罪悪であつても神を愛する愛のみは罪悪ではないと気がついた。そしてそれを「核として」新しい人格を築いて行つたといふ話である。[25]

このような海老名の人格主義的な信仰理解に深く共鳴した中島は、後にキリスト教と社会問題との関係を論ずる場合に、「人格」や「自己否定」といったことを、常に自分の念頭に置くようになるのであったが[26]、大学を卒業した彼は、一九一六年九月に、海老名、吉野の推輓によって同志社大学政治経済学部の教員として赴任した（二〇年一一月には法学部と改称）。同志社では、法理学をはじめ、国家論、憲法論、倫理学等の教鞭を取ったが、教会籍は、翌一七年六月一七日に同志社教会に転入している[27]。

よく知られているように、同志社は、一九二〇年四月に「大学令」（公布は、一九一八年一二月）によって私立大学としての認可を得て大学への昇格を果たし、中島が所属していた政治経済部も法学部に改称されることとなった。そして、第八代総長には、本郷教会の牧師であった海老名弾正が就任することになったが、この出来事は、彼の弟子であることを自負していた中島にとっても、心強い精神的な支柱となったことであろう。総長に就任した海老名は、それまで専門学校であった同志社を、正規の大学としてふさわしいものにするために、組織的にも陣容を拡充する必要を覚えた。「日本を世界に指導し行く所の人物」を輩出することを念じた彼は、特に人的な側面における強化を図ったが、そのために東京の吉野らも協力して、次々と優秀な人材を京都に送り出し、特に法学部では、中島をはじめ、今中次麿（政治学）、山本亀市（刑法）、永田伸一（社会学）、波多野鼎（社会思想史）、河野密（刑法）、能勢克男（民法）や、さらには経済学の林要、長谷部文雄、宮川実、財政学の和田武といった多彩な人たちが教授陣に名を連ねて、彼らは、新しく刊行されることになった学術誌の『同志社論叢』（発刊は、一九二〇年三月）を中心に、優れた研究の成果を精力的に発表していった[28]。その学問的なレベルの高さは、学界の注目を引くこととなり、後に「同志社アカデミズム」とまで呼ばれるほどであった[29]。特に、中島と同じく吉野の門下生で、本郷教会にも属していた今中次麿は、『新人』の同人として、デモクラシーを確立する政治論を追求していったが、中島も、彼からは多くの啓発を受けていた

ことであろう。[30]

中島も、同誌の創刊号に「国家本質に関する二大思潮の対立」（一九二〇・三）を執筆したのを皮切りに、「ナショナル。キルヅと国家主義との関係」（第二号、同年・六）、「英国に於ける新国家論」（第三号、同年、一二）、「ギルド・ソーシャリズムの職業連邦国」（第五号、一九二一・五）、「多元的国家学説成立の可能性」（第七号、一九二二・二）と、精力的に寄稿していった。そして彼は、これらの論文に、『新人』に発表した「英国における新教会論」などを加えて、彼の代表作の一つとなった『多元的国家論』（内外出版社、一九二二）としてまとめている。同書の中で中島は、爾来、主流であったヘーゲル流の国家論を斥けて、スペンサーに見られるような、個人の尊厳を基調にした国家像を模索している。彼によれば、国家もまた、一つの「団体」であるという。そして、その「団体」とは、「一定有限なる特殊目的を共同に達成せんためにする人類の合意的結合にして組織あり職能あり限界あるをその本質とす」と定義されている。[31] よって、そこでは、それまでの統一国家の形成といった国家主義的な世界観は排され、国家の存在形態そのものが改めて問い直され、その際に中島は、その理論的な展開に当たって、中世ヨーロッパの教父トマス・アクィナスの神学的法思想を近代国家論に援用しつつ、多元的な社会内諸団体の存在目的を、人類の至高善の究極的な価値実現に求めて、人間各個に内在する人格的価値を実現する基礎として、「生命的具体的実在者」としての「偏在の神」の理念を、その理論的支柱とするのであった。それは、自分の恩師である吉野の考え方を、彼なりに踏襲して、ドイツ的な政治学に対するアンチテーゼともなっている。[32]

ちなみに、後年になって中島は、そうした自己の学問的な基礎を築く上で影響を受けた人物について、次のように辿っている。

（前略）法といふものの本質に就ては主として恩師牧野英一先生に負ふ所である。法理学を公法の領域から開拓して見ようといふことは、恩師筧克彦先生の示唆に基く所である。然れども之を多元的国家観の立場からするやうになりたることは、間接には恩師美濃部達吉先生・吉野作造先生等の自由主義民主主義思想の感化であり、直接には、社会学者高田保馬博士の示唆に負ふ所である。社会の進化及び社会問題の観方等に就ては、マルキシズムに負ふ所が大であり、同僚又は友人として接触した多くのその信奉者諸君に依りて啓発せられたものである[33]（後略）。

二　賀川の同志社伝道と百万人救霊運動

そうした中島に、実践面におけるインスピレーションと確信を与えたのが賀川であった。彼が賀川と初めて接触したのが、具体的に、いつのことなのかについては不明であるが[34]、一九二二年六月に大原社会問題研究所の高野岩三郎らの発起によって、賀川を校長とする大阪労働学校が設立された際には、同僚であった河野、林、波多野や住谷悦治が講師として参加してもおり[35]、中島も、賀川の存在については注目していたと思われる[36]。

その中島が、賀川と直接に出会うことになったのは、一九二五年一一月八日から一一日にかけてもたれた同志社の特別伝道集会に、賀川が講師として招かれた時のことである[37]。この伝道集会は、日本基督教連盟、基督教青年会、同志社教会の連合で企画されたものであったが、賀川は、一一月八日に同志社教会で礼拝説教を行ない、同日の夜には、同志社の男女寄宿生を対象にした集会に出席し、翌九日には、京都岡崎公会堂と同志社の神学館を会場にして、彼を講師とする伝道集会が開催された。連日の集会はいずれも盛況で、毎朝六時から行なわれた賀川が指導する早天祈祷会には、平均二〇〇名の参加者があったという[38]。

ところで、この、賀川が同志社に招かれた時、彼の主唱によって生まれていたイエスの友会は、「百万人救霊運動」を全国的に展開しようとしていた。[39] このイエスの友会は、一九二一年一〇月に、賀川の発意によって、「（一）イエスにありて敬虔なること、（二）貧しい者の友となりて労働を愛すること、（三）世界平和のために努力すること、（四）純潔なる生活を尊ぶこと、（五）社会奉仕を旨とすること」の五項目の生活綱領を定めて結成された同志的な集団であったが、[40] 発足当初は、参加したメンバーの間にも、さほど具体的な運動の展望や方針といったものは持ち合わせてはいなかった様子である。[41]

しかし、この時、賀川の教会変革への思いはやみがたいものがあった。彼は、次のように述べている。

私は今日の教会と行く道を異にして居ります。それは今日の教会は小さい罪を八釜敷云ふて、大きな資本主義の罪を脱かして了ふことです。私はこの点に於て今日の教会が行つて居る安易な道を歩きたくありませぬ。それで私はたゞ坦々たる福音宣伝者の道を歩きますまい。昔の伝道は地理的に広く宣伝すれば善かつたのです。然し二十世紀には空間的伝道よりか更に、内質的な宣伝が必要とせられて居ります。それは資本主義に対する必死の伝道です。（中略）私は、資本主義が悪ければ、それを悪いと宣言し、労働階級の道が誤つた道に行けばそれを悪いと宣言します。私は文明批評家の立場から、神と正義の立場を取ります。私は唯心史観の真理の為めに徹底的に戦ふつもりであります（傍点引用者）。[42]

この文章の中で、賀川が述べている、自分と歩む方向を異にしている「今日の教会」とは、具体的には、賀川が属していた日本基督教会のことであろう。また、「労働階級の道が誤つた道に行けばそれを悪いと宣言します」といっ

たくだりは、この前年の七月に起こった神戸の川崎三菱造船争議の惨敗によって、サンディカリズムの台頭の中で、賀川が指導的立場を失墜して、労働運動から離脱していった経緯について言及したものと思われる。賀川の「労働組合は一つの宗教である。それは愛と労働を基調とし、資本主義を破壊し、人間至上を讃美する純真なる衝動から湧き溢れてくる宗教である」[43]といった思弁的な主張は、運動の現場の活動家たちには、容易に受け入れられなかった。そうした賀川が、自己の社会実践の活路を新たに見出したのは、一つは、杉山元治郎らとともに創立した日本農民組合（創立は、一九二二年月四月）であり、今一つは、このイエスの友会を軸にした「新しい宗教者運動」であった。

こうした賀川の喚起に応えるかのように、時を経るにつれて、同会に参加を申し込む人たちが増えてゆき、それにともなって、活動の内容も、それまでの教会教職者たちが中心であった性格から一般信徒層に移ってゆき、同会の働きは、次第に信徒運動（Lay Movement）としての性格が強いものへと変化していった。とは言え、イエスの友会は、賀川のカリスマを中心にした「信徒集団」としての性格が強いものであって[44]、新入会員も、労働者や店員、会社員、教員など、さまざまな職業層であった。それゆえに賀川は、それらの会員を結集し、運動を、より自発的なものにする必要を覚えた。そうして、同会の働きも、次第に、それまでの教養主義的なものから、より自主的な社会実践を志向する独立した運動体へと脱皮してゆくことになり、その目的の達成と同志の結束を強めるために企画されたのが修養会であった。第一回の修養会は、一九二三年八月二五日から二九日にかけて御殿場東山荘で開催されたが、講演のほとんどは賀川が行ない、その他に、石田友治、村島帰之、新明正道も協力したが、聖書研究を除けば、講義の主題が労働問題や社会問題をめぐるものであったことを見れば[45]、イエスの友会が、それまで賀川が思い描いていた宣教のミッションを具体化する運動体へと育成されていった経緯が読み取れよう。

結成されてからのイエス友会は、一九二二年二月の賀川が台湾伝道に赴いた際には、彼地で伝道活動をしていた井

上伊之助を支援するための協力献金を行なったり、翌二三年九月に起こった関東大震災では、被災者の救援活動に奔走する賀川を支援するなどして、次第に実践的な性格を強化してゆき、二五年一月には羅府支部も結成され、同年一〇月一日には、同支部の献金によって、大阪の此花区で日本労働者伝道会社四貫島セツルメントが生まれ[16]、さらに、同月八日には、イエスの友会店員ミッションも組織されている。また賀川の方は、関東大震災の救援活動を機に、活動の拠点を関西から東京に移して、各種のセツルメント事業に着手してゆくのであったが、翌二四年四月には、内閣より帝国経済会議議員と不良住宅地区改良委員会委員を、さらに五月には中央職業紹介委員会委員も委嘱され、翌六月には政治研究会の執行委員に就くといった具合に、中央の行政当局からも注目され、翌二四年三月には、恩賜財団済生会の評議員にも抜擢され、六月には救癩協会を設立するなど、多忙を極めている。

賀川が同志社に招かれた一九二五年七月三〇日から五日間の日程で、イエスの友会は第三回修養会を御殿場東山荘で開催したが、賀川は、初日の夜に行なわれた説教の中で、「今、吾々は、整理を要求されて居る。一人一人の魂の根本的なる整理を断行しなくてはならない。（中略）今は日本の変動期である、即ち、日本は今ヤボクの渡しに立つてゐる」として、次のように述べている。

私は確信を持つていふ、若し諸君が決心するならば、来るべき十年の後二本をつぐもの　諸君であることを。イエスの精神を持てるもの丶外に、誰が地を嗣ぐのであるか？諸君は其を信じないか？信じなければそれまで丶ある。諸君は自らの弱いことを嘆いていてはならぬ。若し諸君がヤボクの渡しを前にして、自分の整理をなし、進んで日本と世界に整理を施す決心を持つて立上がるならば、日本は諸君のものである。[17]

いかにも賀川らしい煽情的なアピールであるが、ここで賀川によって提起されている「日本と世界に整理を施す決心」の意味しているところは、どのようなものであったのか。同じ修養会で行なわれた講演の中で、彼は、以下のように説明している。

世界を巡歴して痛切に考へさせられる事は、今日ほど世界が整理の必要に迫られている代はないといふ事である。然らば、今、世界を整理するとして、果たして如何なる標準、如何なる出発によつて整理をなすべきか。（中略）今日の教会を見るに、彼等の多くは天国の近づいた事を宣べてはゐない。教会の目標がきまつては自分丈けさへ救はれゝば能事足れりとし、個人的道徳の完成を期するだけで、更に積極的に病人を癒し、死人を甦らせ、癩病を潔める恵みから全然離れてゐる。乳児死亡率を減じ、国民に活を与へる事を忘れてゐる。況んや、狂乱のアナーキストを追ひ出す力は、彼等には全然か欠けてゐる。（中略）諸君が工場に、田園に、病院に働く時、諸君自らが神の国の宣伝者なる事を思へ。そしてその日常茶飯事の行動に、神の国の福音を示現せねばならぬ。行ひによつて福音を宣べ伝へねばならない（傍点引用者）。[48]

この時、会場に設置された講壇の正面には、「百万の霊を神に捧ぐ」とのスローガンが掲げられていたというが、[49]かくしてイエスの友会は、賀川の主導のもとで「百万人救霊運動」を展開することとなり、八月一五日に六甲山で開催された関西イエスの友会修養会において、自分たちの運動を「神の国運動」と命名することになった。この修養会で賀川は、参加者に向って次のように鼓舞している。

今日、唯物的な主義の徒が、あらゆる社会へ侵入を計つていると云ふが、我々は、彼等も増して敏捷に、人の顔を恐れざる神の国運動者として、あらゆる社会のくまぐま迄もしみ入ることを謀らうではないか？工場に、店頭に、実験室に、病院の解剖室に、じめじめした労働街の路地裏に、喜びの音づれを。もたらす者として割り込んで行かうではないか？（傍点原文）。[50]

したがって、賀川サイドからすれば、この百万人救霊運動が、この年の一一月の同志社伝道へと連動していったのであった。

三　雲の柱会の結成

さて賀川は、この同志社伝道の中で、無神論によらずにイエスの福音によって無産大衆を救済することの意義について力説したが、その場に臨席していた中島も、これに強く共鳴して、即座に、「マルキシズムの正しい批判と基督教の再認識」を研究の眼目として、同僚の教職員、及び学生たちとともに、研究会の発足を思い立った。同月一三日にもたれた相談会では中島が司会を務めたが、冒頭で賀川の伝道についての感想祈祷が捧げられ、それに続く懇談では、佐々木学生舎監から、今後の研究会の活動をめぐる具体的計画の発案がなされ、協議の結果、計画案の作成は、中島をはじめ、文学部長の大塚節治、学生クリスチャン委員長の高橋虔、末松信三中学部長、そして図書館司書の高橋元一郎に委任された。この相談会の来会者は、男性二二名、女性二〇名であったが、イエスの友会京都支部の北川信芳も出席している。そして、この相談会において、次のような檄文が飛ばされている。

それ兄弟よ爾曹は召を蒙りて自由を得たる者なれば也ざれど其自由を得を機会として肉に循ふ勿れ唯愛を以て互に事ふることを為よ…なんぢら慎よ若したがひに呑噬はば恐くは互に滅されん（ガラテヤ書五ノ一三―一五）見へざる御手新島襄先生を導き給ひかくて同志社は創設されぬ。五十年後みへざる御手一人師、賀川豊彦氏をつかはし我等に悔ひ改めと覚醒を促し給ひぬ。いざ起きて我等光りの道を歩まむ。見よ、雲の柱を！[21]。

文面にほとばしっている精神的高揚の中に、この時の賀川のメッセージが、いかに中島らの心を激しく揺さぶるものであったかが伝わってこよう。次いで同月の一九日には、神学館で出席者四八名のもとで創立委員会がもたれ、活動の内容として「雑誌『雲の柱』購読の件」、「賀川先生の著書購読の件」、及び「早天祈祷会開催の件」が決議され、実務の担当は高橋元一郎に一任された。また、今後の「直接の事業」としては、「第一部　基督教社会問題の研究」、「第二部、社会教化運動の実行」、「第三部　校内奉仕の実行」、「第四部　事務所」の四部門が設置されることとなった。なお、第一部の「基督教社会問題の研究」については、中島と森川講師が当たることになり、毎週水曜日の午後三時より神学館で研究会を実施し、第二部の「社会教化活動」については、上鴨方面における伝道の推進、第三部は、学内のチャペルその他の清掃奉仕等を行なうことが、当面の活動の眼目に挙げられている[22]。そして、この研究団体の名称は、右記の檄文にもあるように、「雲の柱会」と命名された。よく知られているように、この「雲の柱」の呼称は、『出エジプト記』に描かれている、エジプトで奴隷状態にあったイスラエルの民を解放へと導くモーセに対して、神が提示した幻想的なシンボルであったが（一三・二一―二二）、具体的には、賀川が主筆であった機関誌『雲の柱』の存在を念頭に置いていることは明らかである[23]。

かくして、中島を中心にして雲の柱会は結成の運びとなり、毎週の定例研究会には、神学科の有志の教師たちや学生、そして女子専門学校の生徒ら二、三〇名の出席者があったというが、一方の賀川も、同会の発足を喜び、次のようなエールを送っている。

（前略）十一月はよく動いた。十月の暮に紀州にまわつた私は、十一月一日より、大阪天満教会を手伝つた。そして誠に愉快な集会をした。天満が済んで、私は堺に行き、堺から私は京都、同志社大学の五十年記念伝道に出かけて行つた。そして三日四朝（ママ）の伝道講演に私はうれしい同志を得た。殊にかしこで「雲の柱」の会を作つてくれられて「雲の柱」を中心としてキリスト教を中心とする社会思想の研究をしてくれる団体の出来たことをうれしく思ふのである。同志の健在を祈ること切である。先日も労働運動の強者であつた某法学士に会つたところが、「賀川さん、今日の問題は唯物史観の誤謬を訂正することにありますよ」と云ふて居られたが、私はこの点に就て、同氏が一大転機を発見せられんことを祈つてやまざるものである。[54]

この文章の中に記されている「某法学士」とは、中島のことであろう。中島自身も、雲の柱会を発足させた経緯について、自己の精神的な遍歴も含めて、後に、次のように述懐している。いささか長文ではあるが、貴重な資料でもあり、引用しておく。

（前略）私は子供の時から日曜学校で育てられ、二十三の年に洗礼を受けて、クリスチャンとなり、海老名先生の弟子であることを光栄にして居るものでありますが、社会問題を段々研究するやうになりまして、四五年此方どう

しても今迄の信仰ではいけないといふことに気がつき悩み始めました。頭だけでは略斯様だと目安をつけて居つた時に、図らずも賀川先生に接触することが出来まして、初めて非常なる光明を与へられ、頭だけで気の付いて居たことを、初めて信仰的に掘り下げることが出来たのであります。私は賀川先生と同年輩である光栄を有して居りますが、実は賀川先生は、私が三十二、三の年の頃同志社に見えまして、私どもと一緒に講演して下さつたことがあります。その時私は「ナショナル・ギルヅと国家」といふ題で講演しましたが、先生はあとから演壇に立たれ、「ナショナル・ギルヅの研究がどれほど進んでも、その精神を獲得しなければ駄目だ」と言はれました。私は実はその時はその言葉をあまり気に止めませんでしたが、此頃になつて、或人からそのことを聞かれて、今日その通りになつて居ることを思つて、不思議な因縁と思つて居るのであります。私はギルド・ソシアリズムから研究し始めまして、此が最も基督教精神に近いのであることを知つて、之に共鳴して居つたのでありますが、どうしても一つ根本に於て自分の気持のハツキリし兼ねるもの、あることに気がつきまして悩みました。それは今迄の基督教では此社会問題といふ絶壁（中略）を乗り越へることが出来ないといふことです。私は今迄の基督教の殻を思ひ切つて脱却してしまはなくてはならぬと思ひ、凡そ斯様だらうと思ふ所を探り足で進み始め居ました所へ賀川先生が今から四年程前に同志社に来られて、数日連続して徹底的に伝道せられました。その時、私は賀川先生こそ、私どもの行き悩んで居る絶壁を飛び越えて、勇敢に向ふに進んで居るその人だといふことに気がついたのであります（傍点引用者）。[55]

これに続いて中島は、「賀川先生の信仰は私どもの求めて居つた物であるといふことを知りまして、自分の信仰を此から叩き直さなければならぬ決心致しました。そして『雲の柱会』といふ会を作りまして、若干の同志とともに基督教と社会問題との関係に就いて研究を始めました」と述べている。ここに示されるように、賀川による同志社伝道

は、篤実な理論家であった中島にとって、まさに天啓とも呼べるものだったのである。[56]

なお、中島は、同志社で雲の柱会を結成したばかりでなく、京都帝国大学、同志社、三高の教職員、及び学生有志たちによって設立された京都鼎浦会にも参加しており、一一月二一日にもたれた同会の研究談話会について、『同志社時報』は次のように報じている。

基督教的思想家として知られ、基督教主義の政治家として立ち、帝国議会を聖化せんと志し、病軀を侵して奮闘したが、病魔の為に斃れた小山鼎浦氏の精神を発揮して思想の方面に於て、政治経済及び社会の方面に於て基督教的理想主義を徹底せんとする趣意を以て京都鼎浦会なるものが京都帝大、同志社、三高の教職員学生の有志によつて生まれたのである。同会の研究談話会が十一月二十一日夕六時半より京大楽友会館に於て左の順序に於て開かれた。

（中略）

一、発会の辞　同大委員　本宮教授
二、鼎浦氏に就て　京大　大槻教授
三、「久遠の基督教」より受けし感化　同大　中島教授
四、所　感　三高　瀧浦教授
五、鼎浦の人格並に思想　京大委員　深田教授
六、鼎浦氏を憶ふ　同大　海老名総長（後略）。[57]

小山東助（「鼎浦」はペンネーム）は、吉野作造とは母校の仙台第二高等学校の同期生であり、上京して東京帝国大学に入学後は、吉野が会員であった本郷教会で受洗して、『新人』の編集にも携わっていた。一九〇三年七月に大学を卒業した彼は、島田三郎に私淑して毎日新聞社に入社した後に早稲田大学講師、関西学院高等科文科長を歴任して、一九一五年には衆議院議員に転進して政治家の道を歩んだが、その四年後の一九年八月二五日に、三九歳の若さで急逝した。[58] 京都鼎浦会の設立は、一個のキリスト者として政治家を志し、その思いを果たせずに世を去った小山の精神を受け継いでゆこうとしたものであった。吉野の薫陶を受け、小山とは同じ本郷教会の教会員でもあった中島も、それに共鳴して、参加したものと思われる。

その後、雲の柱会は、この翌二六年一月に、学内で行われていた軍事教練のために、チャペルを使用されることに対する反対運動を起こしている。[59] よく知られるように、この前年の二五年四月に陸軍現役将校配属令が公布されて、教練教授要目が制定されたが、同志社もこれに応じて、この年の四月から学内で軍事教練が実施されることになった。この学校教育の現場における軍事教練の実施が決定されると、各地で学生の反対運動が展開されたが、同志社でも、社会問題研究会（創設は、一九二三年）の学生たちを中心に反対運動が起こったが、当時、同志社の図書館司書を務めていたキリスト者の高橋元一郎も、これに抗議して、総長の海老名に直談判したが、海老名はこれを受けつけず、そのために、高橋は、これを不服として、この年の三月に図書館司書を辞職している。[60] 海老名からすれば、同志社は、既に文部省から懲役延期の特権や学校教員免許の資格などを与えられており、同志社が軍事教練の実施に反対することによって、せっかく認められた大学の資格を失うかもしれないといった危惧が働いていたと思われる。結局、総長の海老名は、その後、同志社の教育主義と軍隊の訓練主義は矛盾しないとして、両者は人格教育という同一の目的のために存在すると主張して、軍事教練の存在の意味を積極的に認めてゆくのであった。[61] 中島が、そうした海老名の姿

勢に対して、どのように感じていたのかについては、残念ながら不明である。

四　同志社リバイバルと同志社労働者ミッション

ところで、同志社の学内で雲の柱会が結成された頃、日本のキリスト教界にとっても重要な出来事があった。それは、この年の一月に万国宣教連盟（the International Missionary Council、I・M・C）の本部代表であるジョン・モットが来日したのである。鎌倉で開催されたモットを迎えた日本基督教連盟の協議会に参加した賀川は、席上、かねてより準備していた「日本教化私案」を発表して、次のように訴えた。

今のような、日本のキリスト教の進歩では、何年たつてもキリスト教が流布することは出来ない。（中略）少なくとも、今の伝道力の幾倍のか（ママ）力を増やさなければならない。今日では、一六万の信徒が、一年間僅かに一万二百七十一人（大正十年）しか伝道し得ないことになつてゐる。こんなことでは、十年間に日本の信者の数は二十六万人にしかならない。之を百万人にするには、今の五倍の力を出さなければならない。これには今迄の伝道方針を換へて、もう少し親切な伝道法を取らなければならない。[62]

それでは、ここで述べられている「親切な伝道法」とは、具体的には、どのようなものであったのであろうか。賀川は、この点をめぐって、「今迄の伝道方法は、多くの学校出の人々がした為に、学校的になり、学究的になり、親切と云ふことにおこたり勝であつた。キリスト教の本質は、愛と親切である。それでどうしても、教科書的講壇キリ

スト教を脱皮せねばならぬ。講壇社会主義が、講壇のみの救にもならないと同様に、今日の形のキリスト教の振はざるはあまりに当然である。（中略）愛と協力の実際の社会を作るにあらずば、決して真正の社会は出来上らない」と、従来の日本の教会の宣教のありようを批判している。

さらに賀川は、日本の教会の伝道の主な対象とすべきは、現実の社会の中で悩みを抱えている人たちであるとして、「先ず苦しめるものに福音を伝へようではないか」と主張して、伝道活動の領域として、「一、農民伝道、二、労働者伝道、三、漁村伝道、四、水夫伝道、五、坑夫伝道、六、看護婦伝道、七、結核ミッション」の七つを列挙している。そして、その具体的な展開の方法は、それまでの文書伝道に限定されずに、農民福音学校の開設や各種のホーム施設の建設など、彼の念頭にあった民衆の生活改善や自助努力の奨励、及び意識の向上といった感化改良事業が、ほぼ網羅される形で盛り込まれている。また賀川は、「教化につき決議せらるべきこと」として、全国的な合同祈祷網の創出や、教会相互の互助体制の確立、巡回伝道班の組織化、基督教共済組合の設立などの提案も行なっているが、それらの諸活動を推進してゆくに当たって、日本基督教連盟の役割について言及されていることは注目されよう。[63] 賀川からしてみれば、こうした多方面にわたる宣教活動を展開してゆくには、もはや、一教会、一教派によって運営されるものではなく、むしろ、超教派的な一致と協力体制のもとで推進されなければならないと考えたのである。[64] けれども、彼が打ち出したこの運動の理念は、すぐには連盟のものとはならなかった。それが具体化するのは、一九二七年からのことであり、それが、後に、神の国運動として結実されることになるのである。

ここで話題を、中島に戻そう。翌一九二六年に、中島が属していた同志社教会は、創立五〇周年を迎えていた。この時、総長の海老名によって、当時、ハワイのヌアス教会の牧師であった堀貞一を招いた伝道集会が計画され、その翌二七年一月二三日の新島襄永眠記念日をクライマックスに、学内では、連日のように大小の規模の集会が催され、ここに

一大リバイバルが起こることになる。[65] 中島も、同日の若王子山上における墓前早天祈祷会で、参集者を代表して、「十字架を負いキリストに従う」との文面の盟約書を朗読して、一同は、各自、アーメンを唱和して、これに署名したという。[66] また、同日にもたれた「新島先生記念礼拝」では、総長の海老名が説教を担当し、礼拝後、中島による「新同志社建設」の盟約書が朗読された。[67] 加えて、同月三〇日と二月六日の二度の礼拝では、計三三八名が受洗するといった活況を呈しているが、[68] こうした学内にみなぎった霊的覚醒の気運は、次第に学生、教職員の献身の意欲を奮起させることになった。

この同志社のリバイバル（信仰復興）は、その年の二月に、堀貞一が梅花女学校に赴いた時、同校にも波及している。[69] 賀川は、こうした霊的昂揚の動きを、「同志社や梅花女学校で、布哇の掘牧師は非常に大きな感化を与られた。私は日本全国にかうした深刻な運動がもう少し多く起ればいゝと思つてゐる。今日の教会はもう少し団結を固くし会員同志が扶助を実行しなければ、今日の形の教会は十八世紀の末までで使命を果たしたもので、新世紀には役立たないものであると考へて差支へないものであらう」[70]と、高く評価している。

賀川は、この年の一一月二四日から四日間にわたって行なわれた同志社の特別伝道集会にも招かれているが、折しも、この時は、堀貞一が同志社に着任したばかりであって、[71] キャンパスの中は伝道の熱気が高潮していた。たとえば、この時、毎朝六時からもたれた賀川による早天聖書講演には、毎回四百名以上の参加者があり、どの集会も盛況で、チャペルは階上まで立錐の余地がないほどであったという。[72] この同志社における伝道活動は、賀川サイドからすれば、同年八月一一日に軽井沢で開催された百万人救霊運動協議会の成果を受ける形で各地で巡回伝道を展開した一環でもあった。彼は、この時の感慨を、次のように披瀝している。

十一月は努力して走り廻つた。福岡で四日、浜松で四日、同志社で四日、宗教講演をした。そして、福岡では約七百十八人、浜松では百四人、同志社では約七百の神の国運動の同志を得た。海老名同志社総長は、「大衆の目醒めてゐる割に教会の目醒めてゐないのに困りますね」と言ふてゐられた。教会の目醒めるのにはどうすればよいか。それは互ひに援け合ふ工夫をするより外のない。詰り個人主義を打破して、キリストの云はれた愛の運動をするより道はない。今日迄のキリスト教は、互助の方面もまた忘れてはならない。今日の教会はそれを怠つている。[73]

賀川は、この同志社滞在の間に、中島たちとも交流している。その時の様子を、賀川は、次のように報告している。

同志社大学に「雲の柱会」といふのがある。中島教授を中心にして、十数人の大学生が集まつて、キリスト教的社会運動を研究して居る。本年の当番幹事は田原兄がやつて居られる。田原兄は、浜松の中学校の教授をして居られて、今また同志社神学部に通つて要られる。十一月二十六日の午後、雲の柱会の人々とランチを共にして非常の愉快であつた。私は斯うした会が、各地に起つて、真面目な研究が続けられるなら、非常に幸福に思ふ。[74]

こうした賀川の喚起に促がされるように雲の柱会は、その後、それまでの理論研究を中心とした活動の性格を脱して、より実践的な性格をもった運動体として再編すべく、「同志社労働者ミッション」と改称されることになった。一二月九日には、早々に創立会を開いて、「一、基督教の立場から社会思想を研究する。二、基督教を社会的立場より見直す。三、都市、農村、漁村の一般大衆に基督教の福音を宣伝する」の、三項目の活動の目的が決定され、次いで翌二八年の一月一三日には、発会式と講演大会を開催するといった具合に進展していったが、中島は幹事長に就き、

講演大会では、彼による「神の国運動について」、大塚節治の「教会と社会問題」、杉山元治郎による「汝等これにパンを与へよ」との論題の講演が行われている。また、この時に発表された設立趣意書には、自分たちの運動の使命について、次のように高唱されている。

甚だしき不安の雲が全日本を蓋ふてゐる。経済的には行きづまり切つてゐる。失業せる筋肉労働者及び知識階級は二〇万人以上に達しなほ一日一日と増してゆく。企業家は無政府的産業状態が愈々無政府的になるにつれて続々と倒れる。銀行が崩れる。貧しき預金者が理由もなく強奪される。（中略）イエスの宗教は単なる個人の救の宗教ではない。自我完成の瞑想宗教ではない。それは飽くまで実践的な、倫理的社会的なる宗教である。社会的生活の中に神を生かし、吾等が神にまで達せんとする宗教である。それは神の愛国宗教である（中略）失はれたる人間生活の目的と自由の恢復の為に、被はれたる神の光を再び拝せんために社会は改造を要する。（中略）今こそあらゆる種類の労働大衆にイエスの福音を伝道すべき時である。[75]

この同志社労働者ミッションは、事務所を同志社の構内に設けて、事務として「伝道」「教育」「隣保」「互助」の四項目を掲げ、当面は、その準備として「先ずづ研究、報告、講演会等を通じて基督者の覚醒を促し、且賀川豊彦氏主導の労働者伝道に資金を供給することによつて其の伝道に協力する」こととし、これに賛同する者は、会費として一口一ヶ月三〇銭を一口以上拠出することになった。年が明けた翌一八年一月一三日には、同志社学生会館の集会所で盛大に発会式をもっているが、その席上で中島は「神の国運動の意義に就いて」と題する奨励を行ない、続いて、文学部教授の大塚節治が「教会と社会問題」と題して設立の祝辞を述べ、杉山元治郎が全日本農民組合長として「汝

ら之に食物を与えよ」の題下で、日本における小作人の惨状を訴え、「日本に最初の試みが同志社に於てなされたに対して祝賀に耐ゑぬ」との感謝の祈祷を捧げている。[76]

一方の賀川は、この同志社労働者ミッションが結成された一九二七年に、大宅壮一によって編集された社会問題講座の一巻として『基督教社会主義論』（新潮社）を著わし、その中で、次のように述べている。

> 基督教の千九百年に渉る光栄ある歴史に於ては、政治的にも亦経済的にも、共産主義的生活を実現させた事実が、如何なる時代を通じても存在して居たのであって、その光栄ある歴史こそ基督教社会主義の本質であると云はねばならない。基督教の運動はその根本に於て個人主義的な運動ではない。それは神を中心とした愛の運動である。（中略）即ち基督教の運動は、始めから一種の改造運動であつた。（中略）即ち弱者を近づけ、貧民を救ひ、罪人を解放せんとする再生運動だつたことは、福音書を見てもよく解る。それは凡てのものをいと高き所まで引き上げんとする真正の民衆運動であり、強力の支配せざる愛によつて裏書きさせられたる自由の国の建設運動であつた（傍点引用者）。[77]

文面に掲げられている「改造運動」「再生運動」「民衆運動」「建設運動」といった一連のスローガンの中に、この時期の彼が志向していたキリスト教の宣教をめぐるイメージの特徴が窺えよう。このような宣教理念を掲げている賀川にとってみれば、同志社労働者ミッションの結成は、自己が思い描いていた運動に連帯する同志として、歓迎されるものであった。翌二八年四月の『火の柱』には、同ミッションの発足をめぐって、「全校若き学徒の胸には霊火燃え、従来信仰の立場から社会問題を研究して来たが単なる理論的研究に満足を得る能はず、一歩進んで社会に基督教的精

神を実現すべく具体的方法が考へられるやうになつた」と、発足の経緯を詳細に紹介している。[78]

こうして生まれた同ミッションは、この年の七月二七日から五日間の日程で、滋賀県坂本で基督教夏季大学を開催したが、この時、講師として賀川が招かれ、「主観経済の原理」の講義を担当している。さらに、この夏期大学の講師陣には、賀川の他にも、杉山元治郎、吉田源治郎、河上丈太郎、升崎外彦といった、賀川と親しかった人たちも名を連ねているところから、[79]この企画には、賀川側の全面的な協力と支援が寄せられていたことが看取される。また、一方の中島も、この夏季大学に先だって開催されたイエスの友会の第六回修養会には、河上丈太郎らとともに講師として招かれており、両者の関係が、非常に緊密なものであったことが知られる。[80]

ちなみに、この時期に法学部で学んでいた岩井文男は、この時期の中島の急激な内面的な変化を、後に、次のように回顧している。当時の同志社キャンパスの空気を伝える証言として、引用しておく。

> 海老名総長在任の時代は、近代同志社の歴史の中でも最も宗教的雰囲気の横溢した一時期ではなかったろうか。それは同志社の学生数も未だ少数であったことにも原因があるが、何よりも海老名総長自身が天下のキリスト教思想界の大立物であり、大雄弁家であって自ら陣頭に立って教師学生生徒を叱咤激励したからによる。第二は総長在任中二人の有力なる伝道者が校内伝道に招かれたことによる。その一人は堀貞一牧師、他の一人は賀川豊彦師であった。堀牧師は初代同志社の出身者で当時ハワイ日本人教会の牧師であった。特異なる宗教体験をもって母教会において凄まじい働きをしていたものを、同志社教会が特別伝道講師として招き、校内に素晴らしい信仰の旋風を巻き起こさせた。（中略）その宗教体験には禅味があり率直に新島先生の精神を説き、キリストへの捨身挺身を奨められた。特別な神学体系に基づいた主張といったものはなかったが、きわめて平易熱烈同志社の先輩として後輩に道

を説き奨めるという風であった。大学生の間には一部には思想的引掛りを持った者もいて、この伝道者の熱烈な弁をかえって冷ややかに受け止める者も少なくなかった。ところがここに強く心を揺り動かされた者がいた。それが中島重先生である。伝道中先生はよく言われた。堀牧師の信仰には従来の者にはないものが何かある、と。（中略）このようにして中島先生には、従来の自由キリスト教信仰の中にさらに新しい方向の光が射し込みつつあった時に、引き続いて行なわれた賀川豊彦師による伝道に出会ったのである。賀川師は人も知るように神の愛を説き、特にキリストの贖罪愛を力説された伝道者であり社会運動家でもあった。近代における聖フランチェスコにも擬せられた贖罪愛の実践家でもある。この時の賀川師の伝道は、主として神の国運動の一環として行なわれたもので、同志社においても引き続いて何回も行なわれた。堀牧師によってその信仰の方向に新しい光を見出した先生は、賀川師の信仰内容に接して、その方向が決定づけられたと言ってよい（傍点引用者）。[81]

岩井によれば、この頃の中島の賀川への心服ぶりは、「はたから見ても異状とも言うべきものが見受けられた」といい、彼が突然、ある日から賀川服を着て教壇に立つようになって、学生たちを驚かせたと振り返っている。さすがに中島の賀川服の着用は、彼の家族による反対もあって姿を消したというが、自己の信仰的実践のありようを、先ずもって日常の生活態度に求め、「宗教の社会化はすなわち宗教の実生活化である」ことをモットーとしていた彼にとって、賀川服の愛用は、その具体的な表われに他ならなかったのである。

むすびにかえて

さて、この労働者ミッションの夏季大学で中島は、「社会的基督教概論」と題する講義を行ない、先の趣意書の内容を、より理論化した形で開陳している。彼は、この中で、「信仰の根本に就ては二つあります」とした上で、「第一は今迄の神観では駄目です。根本に於て神観が変つて来なければなりません。その次にキリストの観方が今迄のものより変つて来なければなりません。此二つのことが今迄のとは違ふといふことを私どもは非常に意識するのであります」と述べて、従来の信仰者の神観とキリスト理解の変革を促している。その一方で中島は、マルクス主義の階級闘争については、「利己的な、集団利己的な階級と階級との間の闘争といふやうな形に於ける階級闘争なるものはそのまゝ是認することは出来ない」と斥けて、次のように主張している。

（前略）先づ第一に基督教自体の立場を動くものであることを認め、而して其の次に階級闘争説の根本に食ふ入つて之を基督教的に改めるといふ二つの点だけは少くともハツキリ意識されて居なければ何を論じても到底何等の解決は与へられないと思ふのであります。今迄のクリスチャンは基督教と社会問題の関係といふのは、基督教の社会的アツプリケーショに過ぎないものと定めてかゝて居る。之では何時迄経つても此問題は分からぬのであります。（中略）そして基督教の立場を一転換致しまして、その立場から階級闘争の如き賛成し難いものを除いて、其他のすべての社会思想のうちに含まれて居る真理を活かして、自分の物とする精神が無くてはならぬ。此が無い限り社会問題の解決は出来ないのである。[82]

この講義は、内容的には問題提起としての意味合いが強いものであって、この時点で中島が、キリスト教の神観をどのように神学的に理解し、かつ理論化してゆこうとしているのかは明らかではない。しかし、彼が、社会問題の解決の思想的根拠を階級闘争には置かずに、動態的なキリスト教の救済観に求めていることは看取されよう。そして中島は、この講義を「賀川先生の影響は固より多大であつて、賀川先生を先輩として指導を受けて居るのである」と結んで、同志社労働者ミッションが、彼の思想的な影響下にあることを改めて明言するとともに、賀川の活動と提携する形で、今後の運動を展開してゆくことを訴えている。そしてその後、同ミッションは、同志社の学内組織という枠を越えた、全国的な地域活動を展望して、翌二九年一月三日には、日本労働者ミッションへと再編されてゆくのであった。ちなみに、日本労働者ミッション設立時の役員の陣容は、以下の通りである。

幹事長　中島重
幹事　田原和郎、小谷信市
委員　竹中勝男、大塚節治、石田秀一郎、宗藤圭三、高橋貞三、大江直吉、野村治一、田中光三、山路順吉、佐藤茂見、十川十二、加藤健爾[83]

また、この時に発表された設立趣意書には、労働者に対する旺盛な伝道の意欲が、次のように高唱されている。

現代社会の組織は巨大なる資本主義経済組織の上に立てられている。それは曾て人類の文化を促進せしめたものであるが、今や進んで止まない人類の文化を反つて阻害する桎梏となりつゝある。（中略）かくて最早や社会はそ

の弊害に耐え得ない。改造を要する。失はれたる人間生活の目的と自由の回復の為に、被はれたる神の光を再び拝せんために社会は再び改造を要する。而て来るべき改造の力となる要素たるべき労働大衆を除いて社会の改造は不可能である。今やあらゆる種類の労働大衆にイエスの福音を伝道すべき時である[84]（後略）。

このような鮮烈な社会的献身への使命感は、青年たちをして、社会の現場に送り出さずにはおかなかった[85]。鳥取高等農業学校から同志社大学神学科に進んで、雲の柱会のリーダーの一人になった佐野（石田）英雄は、卒業後、兵庫県の曽根で農村伝道を始めて、三〇年に曽根教会を設立するとともに、翌三一年には農村セツルメントを建設し、金田弘義も、神学科卒業後、賀川の求めに応じて大阪汎愛教会に赴任して、都市労働者セツルメントを開始している[86]。また、佐野と同じく神学科に学んでいた手代木文と法学部出身の岩井文男は、京都府綴喜郡の田辺と草内村に、それぞれ農村伝道のために派遣されて、献身的な奉仕活動をしていった。さらに、二七年に神学科を卒業して堺組合教会に赴任した中村遥も、後に転進して、三一年三月に大阪市港区田中元町で、水上生活者の家庭の児童たちを救済するために「水上友愛協会」（現在の「大阪水上隣保館」の前身）を開設している[87]。彼らに対して、中島や賀川が支援と協力を惜しまなかったことは、改めて述べるまでもない。なお、岩井は、翌三二年一月に賀川からの要請で、岐阜県賀茂野富田村で農村伝道に従事することになった。

そればかりではない。同志社労働ミッションは、一九二八年六月に、学内に「同志社学生消費組合」を創設している。理事には中島や石田秀一郎、田原和郎、堀貞一らが就いたが、同組合の組合長に就いた寺田徳太郎は賀川の門下の一人であり、設立後、同組合では、賀川をはじめ、神戸消費組合長の福井捨一や東大経済学部教授の本位田祥男らを招いた講演会や、ロシアの協同組合ポスター展、賀川服の販売、胚芽米の奨励など、学生層ばかりではなく、教

職員の家庭や女性層をも取り込んだ家庭経済の合理化と組織化を呼びかける啓蒙運動を展開してゆき、同年八月には、同志社購買組合の経営を引き受け、「同志社消費組合」として再出発している。[88]

けれども、こうして新たな運動の進展が期待された日本労働者ミッションではあったが、この年の三月に起こった、校地購入問題に端を発した同志社学内の内紛の結果、中島が斬首されるといった緊迫した事態に直面して、深刻な動揺をきたすこととなった。[89] それでもメンバーたちは、七月には第二回基督教夏期大学を開催して、相互の結束を固めて、今後の奮起を期していたが、運動の指導的な支柱を失った同ミッションは、結局は、解体を余儀なくされることとなる。この間、事件の渦中にあった中島の苦渋は、察するに余りある。しかし彼は、「われらは、どこまでも十字架によりて神の国に共同社会を建設せんとするものである。（中略）されば十字架の社会運動こそは最も深い意義における社会運動であり、神の国運動こそは最も高き意味における社会運動というべきである。かくてこそキリストの十字架はさんとして、人類文化の行手に真の光を放つものということが出来る」[90]と、同志たちを激励し続け、自らも社会実践に対する決意を、改めて鮮明にするのであった。折しもこの時期、賀川の提唱で神の国運動が展開されようとしており、中島も、この運動には多大な期待を寄せていたことであろう。

同志社を去った中島は、翌三〇年に関西学院に招聘されて、田村徳治らとともに同校で教鞭を取って、学生たちに精神的感化を及ぼす一方で、新たな社会的宗教運動、即ち「社会的キリスト教」を発起することとなるが、中島を関西学院に紹介したのは、賀川であった。[91] 他方、同志社では、二九年四月以降、同志社基督教青年会や同志社消費組合を中心に活動が継続され、謄写版刷の機関紙『日本労働者ミッション月報』を刊行している。同紙は、同志間の連絡と交流に資することとなり、これが、後の『社会的基督教』の前身紙となるのである。

付言ながら、中島は、同志社労働者ミッションが結成された一九二七年に、神学科の紀要の『基督教研究』に、「基

督教と社会問題」と題する論文を執筆している。この文章の中で彼は、キリスト教と社会問題との関わりについて、さまざまな角度から考察を試みているが、中島によれば、キリスト教と社会問題との関わりは、もとより、「神学に組織することは大切なこと」ではあるが、「神学に組織せらるゝには先づ体験が必要」であるという。ここで「体験」が重要視されているのは、やはり、海老名の感化によるものであろう。その上で中島は、「体験無き頭脳と概念だけの神学は死せる神学であつて何の価値も無い。私共は今先づ体験を得なければならないのである。神学を談ずる処迄進んで居ない」と主張して、次のように述べている。

（前略）然し若し多少見当をつけることを許さるゝならば今後の神学は社会学と大乗仏教の哲学に重要なる材料を見出し得るのではないかと思ふ。（中略）此処で吾人は国家以上の深い根本的の共同社会（Gemeinschaft, Community）なる思想を学ぶことが出来る。此共同社会に於ける人格と人格との関係を神の光に於て観れば最も深遠なる社会神学（Social Theology）を建設することが出来ると思ふ。[92]

しかし、かと言って中島は、ラウシェンブッシュなどのアメリカにおける社会的福音（Social Gospel）運動については、必ずしも評価しない。これに対しては、「寧ろ従来の基督教よりも遥に浅薄なもとなつてしまふであらう。米国に於ける基督教の社会化は基督教の浅薄化に終るであらう」と批判している。その上で中島は、「深遠なる社会的基督教神学を組織し得る可能性は東洋人たる日本人に多分に。若し此が出来たらば世界に誇るに足る日本人の独創であり貢献である」と述べて、そのようなキリスト教を体験した人物の一人に賀川を挙げて、次のように高く評価するのであった。

日本で今迄の処上述のやうな基督教を体験した人に誰があるであらう。私はあまり多くの人を知らない。然し賀川豊彦氏は確にその一人であると思ふ。同氏の宗教思想は彩色し過ぎた絵のやうにベタ〳〵と色々なものが附着して居る。然し中心中核は此宗教である。同氏を単に貧民窟に入り込み社会運動をする感心な人とのみ観て居る人は、眼を開いて見直すがよい。同氏の宗教を自分等の持つて居るものと、毛色の異るの故を以て棄て、顧みざる人はもう一度見直すがよい。其処に文明史上画期的な新価値が出現して居ることに気が付くであらう、同氏の神学は生物学に材料を探つて居るが、華厳哲学に多大の共鳴を感じて居られる事実を見逃してはならぬ。[93]

これに続いて中島は、賀川の他にも、このような新しいキリスト教の可能性を示したキリスト者の実例として、堀貞一や片山幽吉、小山東助の名を列挙して、最後に海老名についても言及して、彼に対して次のような苦言を呈している。

（前略）最後に海老名弾正先生が居られる。先生を同志社の総長にして金の事に屈託させるのは正宗の名刀を以て薪を割るやうなものだ。先生は今日迄人格主義を鼓吹した第一人者だ、過去五十年間封建日本を変じて今日あらしめたのには先生の貢献は忘れることは出来ない。（中略）先生の腹の底には尊い否定の大経験がある。それを出して下さい。（中略）先生の経験としての abstract legal God への自己否定が concrete social God への自己否定となるにはホンの一寸の腰のヒネリ方一つです、先生よ、金に屈託することをお止めなさい。同志社は霊に救はれさへすれば金なんか自づと与へられますヨ、今一度立つて新同志社を導いて下さい。大乗新基督教の使徒として博辯宏辭を振つて下さい。東洋の同志社に此新基督教が現れたならば実に此は世界文明史上の大問題ですヨ（傍点引用者）。[94]

先述したように、彼がこの文章を書いた翌年に起こった有終館の出火問題に端を発した内紛問題によって、海老名は総長辞任に追い込まれ、中島もそれに連座して、同志社を去ることになった。その後、中島が提唱した「社会的キリスト教」がどのような展開を示していったのかについては、稿を改めて論じたい。

注

（1）日本人キリスト者の戦争協力の実際について論じたものは少なくない。最近のものとしては、高橋由典「戦争協力の論理と心理―キリスト教の事例」（戦時下日本社会研究会編『戦時下の日本―昭和前期の歴史社会学』行路社、一九九二年、所収）が、概括的に辿っている。かつて嶋田啓一郎氏は、ファシズム期の日本のキリスト教をめぐって、次のように述べている。「（前略）率直に言って、一九三〇年代の日本のキリスト教界は。（中略）少数の指導者を除いては、聖書的信仰人間存在に対するラディカルな改悔への挑戦にも関わらず、社会問題に対して個々の進歩的理解者の態度を示すのみで、戦闘的態度をもって臨むことは稀れであった」（嶋田「軍部ファッシズムと抵抗の一九三〇年代―弾圧・転向とキリスト者の苦悩」本紙、第二二号、一九七四年三月、一九頁）。

（2）この間の経過の詳細については、原誠「戦時下の宗教政策―戦時報国会と日本基督教団」同『国家を超えられなかった教会―一五年戦争下の日本プロテスタント教会』日本キリスト教団出版局、二〇〇五年、所収が辿っている。

（3）「SCM」の略称は、学生キリスト教運動（Student Christian Movement）を指す場合と、「社会的キリスト教運動」（Social Christian Movement）を意味する場合がある。もとより、この両者は、基本的には、運動の成立や資質を異にするものであって、後者は、キリスト教の真理契機を、福音の社会化の位相で理解して、これを実践しようとする思想運動である。しかし、一九三〇年代の初頭においては、この略称は、半ば同義的に用いられていた感があった。なお、本稿の叙述において「社会的基督教」と記される場合は、主に固有名詞として使われた雑誌名や運動団体名とし、それ以外の場合は、「社会的

キリスト教」とした。

（4）日本キリスト教史の通史の中で、「社会的キリスト教」、及び「学生キリスト教運動」について論及しているものとしては、大内三郎「社会問題と社会的基督教」海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、一九七〇年、土肥昭夫「学生キリスト教運動と社会的キリスト教」『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、一九八〇年、古屋安雄・土肥昭夫・佐藤敏夫・八木誠一・小田垣雅也『日本の神学史』ヨルダン社、一九九二年、第二章「一九〇七年―一九四五年」執筆は佐藤敏夫などがある。また、第二次世界大戦後の一七年間、日本で過ごしたチャールズ・H・ジャーマニー氏が一九五九年に著わした "Protestant Theologies in Modern Japan, A History of Dominant Theological Currents from 1920-1960", Tokyo : IISR Press, 1965 にも、「学生キリスト教運動と社会的キリスト教」という独立した章が設けられており、「一九二〇年代後期から一九三〇年代前期にかけての、日本におけるキリスト教学生運動（SCM）こそ、実は社会的キリスト教が日本社会の諸問題と取り組む劇的な姿を、最も如実に示す格好の場であった」との評価がなされている（邦訳『近代日本のプロテスタント神学』布施濤雄訳、日本基督教団出版局、一九八二年、一〇四頁）。

（5）中島「一九三四年に臨んで」『社会的基督教』第三巻第一号、一九三四年一月、一頁。

（6）賀川と中島との関係を「神の国運動」の広がりの中で概括的に論じたものとして、金子啓一「賀川豊彦の『神の国運動』を探る―経過・理念・行方から」『賀川豊彦研究』第一九号、一九九〇年八月がある。また、彼らと同時代の関係者の文献として、大井蝶五郎『社会的基督教　其の批判と確立の為に』聖座建設社、一九三二年にも、社会的キリスト教と賀川との結びつきをめぐる若干の記述がある（同書、一―八頁）。

（7）賀川の主唱によって全国的に展開された「神の国運動」は、戦前の日本における最も大きな規模の超教派的な伝道運動であった。しかし、その全体像については、いまだに十分に解明されてはおらず、今後の研究課題であろう。なお、この運動についての、日本キリスト教史における歴史的な評価としては、土肥昭夫「一九三〇年代のプロテスタント・キリスト教界（一）」本誌第二五号、一九七六年一二月、同「賀川豊彦論」同『歴史の証言―日本プロテスタント・キリスト教史より』教文館、二〇〇四年、所収が論じている。

（8）蝋山正道『日本における近代政治学の発達』実業之社会社、一九四九年、一九六頁。

（9）田畑忍「中島重先生の国家論」本誌第八号、一九六四年四月、同「日本におけるキリスト者の法思想」『法社会学年報』一九六六年、嶋田啓一郎「中島重の社会哲学と社会的基督教」本誌第五号、一九六二年二月、後に住谷悦也編『日本におけるキリスト教と社会問題』みすず書房、一九六三年、所収、同「発展する全体と社会的基督教―中島重とその時代」本

誌第一四・一五合併号、一九六九年三月。

(10) 武邦保「社会連帯主義の法思想―とくに中島重を中心として」『同志社法学』第二十三巻第二号、一九七一年一二月、「社会思想としての連帯主義―国家論への試み」同志社大学人文科学研究所編『日本の近代化とキリスト教』新教出版社、一九七三年、所収、「中島重―その社会連帯の法理学について」『日本の法哲学Ⅰ（法哲学年報一九七八年）』有斐閣、一九七九年一〇月。

(11) 大塚桂「多元的国家論の受容と展開」同『近代日本の政治学者群像―政治概念論争をめぐって』勁草書房、二〇〇一年、所収、小野博司「明治憲法と政治的多元主義―美濃部達吉と中島重の学説比較を中心に」『阪大法学』第五六巻第三号、二〇〇六年九月。

(12) 竹中正夫「中島重―人格主義の先駆者」和田洋一編『同志社の思想家たち（下）』同志社大学生協出版部、一九七三年、所収、及び同「中島重」キリスト教学校教育同盟編『日本キリスト教教育史（人物編）』創文社、一九七七年、所収。

(13) 武邦保「神学思想史の一側面―中島重の『社会的基督教』に定位して」『キリスト教史学』第二六号、一九七二年三月、「『社会的基督教』における中島重」本誌第二〇号、一九七二年三月、「社会的基督教と弁証法―バルト神学との関連」本誌第二二号、一九七四年三月、「中島重―高梁の生んだ平和の使徒について」『新島研究』第七三号、一九八八年一月、「雑誌『社会的基督教』の一研究―（一九三二年―四一年、月刊・発行人・中島重）」本誌第三七号、一九八九年三月、『「神の国」の社会学―原典から歴史的展開』法政出版、一九九一年。

(14) この点をめぐって中村勝巳氏は、「大正期から昭和」にかけての日本のキリスト教の性格をめぐって、以下のような厳しい指摘をしている。「（前略）世俗の公的な諸領域からキリスト教の影響力が次々に奪われていきますと、キリスト教は後退に後退を重ね、本来ならば、宗教に固有の機能を担当すべきはずであったのに、個人の心情的ないしは情緒的な側面にしだいに追い込まれて、いまや礼拝と神学研究を中心にするようになった。こうしてキリスト教は、社会・文化万般を批判し指導するような能力も精神も次第に失い、また現世の中にあって現世に強く働きかけていくエートスを失っていった」（傍点引用者、中村『近代文化の構造―近代文化とキリスト教』筑摩書房、一九七二年、二九〇―二九一頁）。

(15) たとえば、戦前日本におけるバルト神学の受容の問題をめぐって大崎節郎氏は、バルト自身の歩みとは決定的にかけはなれたものであったとして、「日本の教会が、ときにバルトに訴えつつ、一種の神学主義、教会主義に陥って、その置かれている社会の現実の問題に対して、神学的に責任ある態度を採ることをしてこなかったのではないか」と指摘している。氏によれば、「いわゆる弁証法神学がこの国に急速に受容された背景には、一九三〇年頃のマルクス主義的思想の攻勢に

よって教会が動揺し、確たる教会的神学確立の必要が強く感じられたために、『社会的キリスト教』と対質的なものとして、この神学が受容されたという不幸な事情もあった」（傍点引用者）という（大崎「何を学んできたのか」新教コイノーニア3『日本のキリスト教とバルト―生誕一〇〇年をむかえて』新教出版社、一九八六年、八一頁）。

(16) 金田隆一氏は、SCMをめぐって、「超越的唯一絶対神としての神の存在、同時にその神の主権下にある被造物の存在としての人間の罪意識は希薄であり、必然的に神の恩寵に対する絶対的信従の信仰告白は見ることはできず、極めて汎神論に近い近代化された神観念であった」との認識を示している（同『昭和日本基督教会史』新教出版社、一九九六年、一二八頁）。

(17) この点をめぐって、かつて嶋田啓一郎氏は、次のように指摘したことがあった。「わが国におけるキリスト者の社会的思惟は、社会的基督教の直線的な発展の方向をとらず、むしろカール・バルト、パウル・ティリッヒ、ラインホルド・ニーバーのごとき神学者たちの神学的反省を転回点として、キリスト教に固有な終末論的立場に立ち帰って、そこから社会的行動の指針を再検討する機運に向い、中島氏の社会的基督教思想そのものが、すでに歴史のなかに葬り去られたリベラリズムの一断片に過ぎぬものとして、排除せられ、次第に忘却されようとしている」（前出、嶋田「中島重の社会哲学と社会的基督教」二八頁）。

(18) 中島が学んだ高梁中学校の校長の柳井道民は、キリスト者であった。彼は、一九〇七年に同校に赴任したが、この年に、神戸教会から高梁教会に転籍している。柳井は、学校内にキリスト教的な空気を横溢させることに熱心で、そのために、職員や生徒の中には、受洗に導かれた者も出てきたという。中島も、その感化を受けていたかもしれない。なお、柳井は、一九一七年に岡山県立第一中学校に転任している（『高梁教会百二十年史』日本基督教団高梁教会、二〇〇二年、五三頁）。

(19) 『高梁基督教会会員名簿甲号』（日本基督教団高梁教会所蔵）の中島の欄による。

(20) 中島「年末雑感」『社会的基督教』第六巻第十二号、一九三七年一二月、七頁。

(21) 中島「海老名先生についての断片」『社会的基督教』第六巻第七号、一九三七年七月、二二頁。

(22) 日本基督教団高梁教会所蔵の『会員名簿　明、一五、四、二一、ヨリ大、一四、九、一三マデ　高梁基督教会』には、一九一〇年一〇月二九日付で本郷教会に転出したと記載されている。なお、高梁教会の会員名簿等の資料の提供については、同教会牧師の八木橋康広氏のお世話になった。

(23) 山路愛山「我が見たる耶蘇教会の諸先生」『太陽』第一六巻第一六号、一九一〇年一〇月、『植村正久と其の時代』第五巻、教文館、一九三八年、復刻版、一九七六年、二五六頁。

(24) 土肥昭夫「海老名弾正―思想と行動」和田洋一編『同志社の思想家たち　上巻』同志社大学生協出版部、一九六五年、一〇六頁、吉馴明子「海老名弾正と『新人』の青年たち」『跡見学園短期大学紀要』第一五号、一九七八年三月、五三頁。なお、『新人』の発刊経緯については、『弓町本郷教会百年史』日本基督教団弓町本郷教会、一九八六年、四九―五一頁、田中真人「『新人』の意義と性格」、及び奥村直彦「『新人』に見る時代思潮―明治・大正大替わりを中心に」（以上、同志社大学人文科学研究所編『『新人』『新女界』の研究―二〇世紀初頭キリスト教ジャーナリズム』人文書院、一九九九年、所収）が言及している（同書、一一―一六頁、一〇〇―一〇四頁）。

(25) 前出、中島「海老名先生についての断片」『社会的基督教』第六巻第七号、一九三七年七月、二〇頁。中島は、自分が海老名から受けた精神的感化について、後に次のように述懐している。「私は先生には学生時代より大学卒業後も先生の同志社総長としての在任中、一教授として足掛け九年親しく先生の感化を受けたものであるが、先生は文筆の人ではなくて、説教者であり、弁舌家であつたので、その残され著述は沢山あるけれども、著述に依りては先生の真骨頂は十分には解らず、先生の説教を聴き、その座談を承り、親しく先生に接触して初めて解るのであつて、その点私は誠に仕合せであつたことを感謝して居るものである」（中島「海老名先生の思想と信仰」『基督教研究』第二一巻第四号、一九四五年九月、三八頁）。なお、一九一一年八月六日の夜に、中島の母教会の高梁教会は青年演説会を開催しているが、この時、帰省していた中島は、「唯物論と国家」と題して演説している（前出、『高梁教会百二十年史』五七頁）。中島が、海老名について述べたものには、この「海老名先生についての断片」の他に、「神の国の理想と新人格主義―特に海老名先生の人格主義との関連に於て」（同誌、第八巻第九号、一九三九年九月）、及び「海老名先生の思想と信仰」『基督教研究』第二一巻第四号、一九四五年九月がある。

(26) 中島は、一九一三年一月に執筆した「人格の尊厳」と題した一文の中で、「人格とは銘々の我たることである。人格の根柢には主観が存在する」と書き出した上で、人間の「主観は飽まで認識の客観対象とはならない」として、「他人格も己と同じやうなる他の我なることを認むることによりて茲に同情と尊敬と愛が成立する。此等我と我主観との交渉が人格者間の交渉であつて、社会上種々の活動関係を発生する源である」と述べている。その上で彼は、「自分は今斯の如く人格の本義に於て所謂主観よりする宗教と客観よりする宗教との契合点を見出し得るものである」と述べている。中島によれば、前者は「哲学者の宗教」であり、後者は「科学者の宗教」であって、それらが統一された神理解が必要なのであって、「我等は実に此神秘なる『人格』てふ霊場に於て神と拝するものである。客観よりしてキリストの人格に神を認め彼を以て活ける神の子と仰ぐものは同時に自我の奥深く人格の根柢に主観の本體を探つて霊性の本源に参会し、基督が神の子たるの

尊き自覚に到達して自重修養せねばならぬ」と主張している（中島「人格の尊厳」『新人』第一四巻第五号、一九一三年五月・一日、四七―五四頁）。

(27) 『同志社教会会員名簿』（日本基督教団同志社教会所蔵）の中島の欄による。中島の転籍については、同志社教会牧師の望月修治二氏のご教示による。

(28) 『同志社論叢』、及びその前身誌の『政治学・経済学論叢』の発刊の経緯については、小野高治・緒方純雄「『同志社論叢』と『基督教研究』」『同志社百年史（通史編一）』学校法人同志社、一九七九、所収が紹介している（同書、九二三―九三二頁）。

(29) 田中秀臣『沈黙と抵抗―ある知識人の生涯、評伝・住谷悦治』藤原書店、二〇〇一年、六二頁。中島も、この頃の同志社時代を、「大正九年同志社大学は、新大学令に依り正式に大学として認可せられ、外遊中の海老名弾正先生を迎えて総長とすることになった。この時より足掛け八、九年が間は私にとり最も幸福な想い出の多い時期であった」と振り返っている。なお、この時期の「同志社アカデミズム」の歴史的意義については、西田毅氏が論じている（西田「大正デモクラシーと同志社―海老名弾正と『同志社アカデミズム』の形成」同志社大学人文科学研究所編『第六四回公開講演会―大正デモクラシーと現代』人文研ブックレットNo. 29、二〇〇九年三月）。その中で西田氏は、中島の国家論の持つ現代的な意味についての再検討の必要性を訴えている（同書、五五頁）。

(30) 今中の政治論については、土肥昭夫「大正デモクラシー期におけるキリスト者の政治論」同『歴史の証言―日本プロテスタント・キリスト教史より』教文館、二〇〇四年、所収に言及されている（同書、三九二―三九八頁）。

(31) 中島『多元的国家論』、内外出版社、一九二二年、三九頁。

(32) 中島の『多元的国家論』については、ギルド・ソーシアリズムの思想的系譜の観点から田中真人氏が、また、ラスキンの政治理論の影響については西田毅氏が、それぞれ詳細な分析を加えているので、参照されたい（田中「キリスト教社会主義と中島重」、西田「中島重におけるラスキ政治理論の受容」、いずれも本誌、第三〇号、一九八二年三月）。

(33) 中島『社会哲学的法理学』、岩波書店、一九三三年、三頁。この文章に続いて中島は、その後、自分に思想的な影響を与えた人物として、「嘗て同志社大学で同僚たりし恒藤恭氏及び今中次麿氏には、夫々スタムラーの研究に於て、又政治思想史の研究に於て啓発せられたのであるが、就中、海老名弾正先生・賀川豊彦先生等に負ふ所が大である」と述べている。

(34) 賀川が初めて同志社に招かれたのは、一九一九年九月のことであるが、その後、彼が同志社で講演を行なった経緯を辿っておくと、次のようであった。一九一九年九月一一日（場所は神学館長）「社会問題研究について」、一九二一年六月一一日（中学生を対象）「精神生活の発展」、一九二二年一月二一日（中学）「宗教と幸福」、同日（女学校）「宗教講話」（「第

三十二回 Neesima Room 企画展「『大正デモクラシー期の同志社—原田助総長と海老名弾正総長の時代—』資料編」『同志社談叢』第二八号、同志社社史資料センター、二〇〇八年三月、四九—五一頁）。しかし、海老名の賀川評価は、必ずしも肯定的ではない。海老名は「賀川豊彦君や、西田天香君の事を悪評したくはないが、怎うも中古を脱せん所がある」として、「賀川君は余の好きな人であるが、賀川君が十年居つても、矢張近所は貧民窟（ママ）である。怎うして生活が変り、場所も善くならないか。貧民と共に生活するのは善い事である。けれども我等の願ふ所は貧民其者の品位を引き上げる事である」と述べている（海老名「世界に於ける宗教の覚醒」『新人』第二三巻第五号、一九二二年五月一日、一六頁）。

（35）一九二五年八月に発行された「大阪労働学校案内」によれば、同校の「規約」は、次の通りである。「一、本校は大阪労働学校と称し事務所を大阪市此花区江成町一二一に置く。」「二、入学資格は労働組合員又は組合に関係あるものとす。」（但シ一般労働者も詮衡の上入学許す事あるべし）「三、目的　本校は労働者及組合員として必要な知識を与ふることを目的とす。」「四、修業期間を一期三ヶ月とし二期を以て卒業とす。」「五、聴講料は一期三円と定め二期四円とす。」「六、授業日　当分の間毎週月、水、金の午後七時より九時迄とする。但木曜日は研究科を設ける」。大阪労働学校についての研究文献には、次のようなものがある。法政大学大原社会問題研究会編『大阪労働学校史—独立労働者教育の足跡』法政大学出版局、一九八二年、二村一夫「大阪労働学校の人々」『法政通信』第一二三号、一九八二年七月、花香実「大阪労働学校の創設にかんする一考察」『法政大学文学部紀要』第三〇号、一九八六年三月、同「大阪労働学校の創設をめぐって—労働学校史研究ノート（その三）」同誌第三八号、一九九二年三月、和田強「賀川豊彦と高野岩三郎—大阪労働学校の労働者教育思想」住谷一彦・和田強編『歴史への視線—大塚史学とその時代』日本経済評論社、一九九八年、所収、黒崎征治「戦間期の労働者教育—大阪労働学校をおもに」『帝京平成大学紀要』第一一巻第二号、一九九九年一二月。

（36）ちなみに、中島も、後に大阪労働学校には櫛田民蔵、久留間鮫造、新明正道などとともに講師として協力している。具体的には、第三七期（一九三五・一・一六—）、第三九期（一九三五・九・二七—）、第四三期（一九三七・二・八—）（いずれも「政治学」を担当）、第四四期（一九三七、七・二—「立憲政治と選挙法改正」を担当）の四期であった（前出、『大阪労働学校史』一一五、一三四頁）。

（37）『イエスの友会々報』第一七号（一九二五年一〇月二五日）に掲載されている「賀川氏講演日程」の一一月の欄によれば、「八日（日）朝、夜—京都同志社　九日午後、夜　同上　十日　午前、午後、夜　同上」と予告されており、翌一一日には四貫島セツルメント、共益社を訪問して、大阪イエスの友会発会式に出席し、一二日の午後には、神戸消費組合須磨支部で講演を行なうことになっている（同紙、三頁）。この時の同志社における演題は、一一月九日は「イエスと良心の宗教」、

翌一〇日は「イエスと良心の芸術」（全校）、「青年よ内なる生活を充たせ」（中学）というものであった（前出、『同志社談叢』第二八号、五四頁）。

(38) 『同志社教会　一九〇一―一九四五』、日本キリスト教団同志社教会、二〇〇一年、二〇八頁。

(39) 賀川が提唱した「百万人救霊運動」については、横関至「賀川豊彦と日本基督教連盟の『社会信条』（下）」『大原社会問題研究所雑誌』第四三四号、一九九五年一月が論及している（同誌、二一―二七頁）。

(40) 横山春一「イエスの友二十年史話（一）」『火の柱』第一三九号、一九四一年三月一〇日、七頁。イエスの友会の結成は、一九二一年一〇月五日に奈良市の菊水楼を会場に開催された日本基督教会の全国大会が開催された当夕のことであったが、社会問題に対する関心が希薄であった大会の雰囲気に対して、出席していた小野村林蔵とともに憤慨した賀川が、若年層の教職者の奮起を促がし、新たな宗教運動を起こそうと結束した結果、生まれたものであったという。後に賀川は、イエスの友会の結成をめぐって、賀川は、次のように回顧している。「大正十年十月五日、晴れた水曜の午後であつた。日本クリスト教会に属する明治学院出身の私の友人達が、奈良の大きな宿屋菊水楼の一室に集つた。主なる人々は中山昌樹氏、郷司慥爾氏、村田四郎氏、原田友治氏、吉田源治郎氏、高崎能樹氏、河村斎美（ママ）氏、諏訪修治氏、飯島誠太氏、日高善一氏、谷本岩吉氏、松尾酒造蔵氏等の一四人であつた。そして私達は熱烈な祈のうちに新しい宗教運動のために一つの団体を結成することになつた。その席上どう名をつけるかについて投票した処、吉田源治郎氏のが『イエスの友会』と命名することにした。そして会の精神はフランシスカン第三教団の精神をとり入れ、伝道的にはゼスイットの方法をとることゝしたのである」（賀川「イエスの友結成当時の思出」『火の柱』第一二一号、一九三九年九月一〇日、一頁）。また、この時の賀川の意向について、石田友治は、「今の教会員が各教会皆バラ〳〵になつてゐて、社会的の勢力にはならぬので、これを打つて一丸となし、一大社会的勢力にしたい、と云ふ意向であつた」と述べている（石田「イエスの友の往く可き道」『イエスの友会報』第九号、一九二五年二月一〇日、一頁）。

(41) このことは、翌二二年一月に創刊された機関誌の『雲の柱』にも、「イエスの友会は、新しい宗教者運動のための一つの団体である」、「事業としては、イエスの友会の人々が主となって、日本一つの基督教小冊子運動（トラクトアリアンムーブメント）を起す計画がある外、まだ何も決定してゐません」と、簡単な活動の報告がなされていることにも示されている。なお、『雲の柱』は、創刊後、一年間、イエスの友会の同人雑誌として発行されたが、その後、村島帰之の編集によって『イエスの友会会報』が発行され（一時期、『イエスの友月報』『イエスの友会報』と改題）、同紙は、後に深田種嗣、石田友自治が編集に当たり、一九二六年一月からは、石田の編集による『火の柱』と改題された。それにともなって、『雲の柱』の方は、賀川の個人

誌としての性格が濃いものとなって、一九四〇年一〇月の終刊まで続いた。

(42) 賀川「五軒長屋より［身辺雑記］」『雲の柱』第一巻第五号、一九二二年五月一日、『賀川』豊彦全集』第二四巻、キリスト新聞社、一九六四年、六―七頁。

(43) 賀川「愛と労働に国境なし―世界国家と労働階級」『労働者新聞』第五三号、一九二二年一月一日、一頁。

(44) 雨宮栄一「初期『イエスの友会』について」『賀川豊彦研究』第一七号、一九八九年一〇月、二三頁。

(45) この時の講義の題目を列記すると、次のようであった。賀川「生存競争の研究」「使徒ヨハネの宗教的経験」「ヨブ記の研究」「聖書社会学の研究」、石田友治「人生の岐路に立てるイエス」、村島帰之「婦人労働問題」、新明正道「社会学に於ける宗教的見解」横山春一『賀川豊彦伝』警醒社、一九五九年、一九六頁。

(46) 四貫島セツルメントについては、井上和子「大阪におけるセツルメント事業に果たした八田豊子の実践について」『大阪女子短期大学紀要』第一一号、一九八六年一二月、同「賀川豊彦とセツルメント運動―大阪における働きを中心として」『雲の柱』第七号、一九八八年六月を参照されたい。

(47) 賀川「ヤボク河を渡る―心の整理と社会の整理」『雲の柱』第四巻第九号、一九二五年九月一日、復刻版、四九五頁。

(48) 賀川「出発の用意をせよ」前掲、『雲の柱』、五〇三頁。

(49) 前出、横山『賀川豊彦伝』二四八頁。

(50) 賀川「神の国の運動者への言葉―神の国の成長性」『雲の柱』第四巻第一一号、一九二五年一一月、六一九頁。

(51) 「雲の柱会」『同志社時報』第二三六号、一九二五年一二月一日、一二頁。

(52) 「雲の柱会」『同志社時報』第二三七号、一九二六年一月一日、一八頁。

(53) 事実、中島自身、後年になって、雲の柱会の発足が「文字の示す如く、賀川先生の影響下にあるもの」と述べている（中島「石田君の早世を悼む」『社会的基督教』第一〇巻第一二号、一九四一年一二月、一九頁）。

(54) 賀川「アンペラ小屋より」『雲の柱』第四巻第一二号、一九二五年一二月、前出、『賀川豊彦全集』第二四巻、四七頁。

(55) 中島『社会的基督教概論』、同志社労働者ミッション、一九二八年、二一四頁。

(56) 戦後になって、一九五七年一〇月一九日に、同志社大学社会問題研究会が主催して、賀川を囲んで座談会を行なったことがあった。その中で、出席者の住谷悦治が、日本のキリスト教が民衆に入ってゆくことの必要について賀川に尋ねたところ、賀川は、「同志社には中島さんがいなかったら、中島アッシ（ママ）さんはえらかった（中略）僕の言った贖罪愛というのをね、非常によく勉強して、あれくらいね（不明）取得した人はおらんで。（中略）わたしの本を読んでくれると、それでこそ

同志社や」と、中島のことを高く評価していたという（『賀川豊彦のキリスト教と協同組合』同志社大学人文科学研究所第4研究、二〇一〇年、九二―九三頁）。

(57) 本宮彌兵衛「鼎浦会に就いて」『同志社時報』第二三六号、一九二五年一二月一日、一二頁。

(58) 小山東助の生涯と思想については、西田耕三編『鼎浦小山東助の思想と生涯』鼎浦小山東助顕彰会、一九七九年を参照されたい。また、小山のキリスト教信仰については、大内三郎「鼎浦、小山東助論序説―一自由キリスト教徒の生涯と思想」『日本思想史学』第四号、一九七二年、關岡一成「小山東助のキリスト教受容」本誌、第四八号、一九九九年一二月が論じている。

(59) 新島文化研究所編『敬虔なるリベラリスト―岩井文男の思想と生涯』新教出版社、一九八四年、「年表」、二六八頁。

(60) 本田清一『街頭の聖者高橋元一郎』、関谷書店、一九三六年、一〇一頁。室田保夫「高橋元一郎の生涯と思想―詩、社会事業、平和、そして祈り」同『キリスト教社会福祉思想史の研究「一国の良心」に生きた人々』不二出版、一九九四年、所収、四四六頁。

(61) 土肥昭夫「海老名弾正―思想と行動」和田洋一編『同志社の思想家たち（上巻）』同志社大学生協出版部、一九六五年、所収、一三五頁。

(62) 「百万人運動の精神」『雲の柱』第五巻第一号、一九二六年一月一日、二頁。

(63) 前掲、「百万人運動の精神」三―七頁。また、この「日本教化私案」の中に、「農村における医療ミッションを組織すべし。殊に水平社の村々を巡回する最も奉仕的なるものを送る可し」と、被差別部落の人たちを対象に挙げていることは注目されよう（同誌、四頁）。なお、一九二六年五月の『火の柱』に掲げられている賀川の「如何にして百万人運動を完成すべきか？」との文章には、運動の対象として「民衆」と「個人」が挙げられており、「単に言葉―説明に依る伝道の外に、行動に依る伝道を考へ、趣味―詩、文学、音楽等―を通じてする伝道の方策を立てなくてはならぬ」と提案されている（同紙、第九号、二頁）。また、二八年三月の同紙に掲載された「百万人運動実行プログラム」によれば、「大衆運動をなす為に今日の労働組合、農民組合が執つてゐるものと同じ方策を用ひること」が提唱されており、その実際として「無給にて働く多くの同志を得ること」、「会合に出席することに努むること」などの項目に加えて、「全国に修養会の団体を設くること」、「東京附近、仙台附近、山形附近、金沢附近、大阪地方、名古屋地方、四国地方、中国地方、福岡地方、鳥取地方、この十区に連絡機関を設け講師の按排、巡回文庫文書伝道の本部、農民及労働者の福音学校等を必らず設ける必要がある」と付言されている（同紙、第一七号、一九二六年三月、二頁）。

(64) モットは、賀川が発表した私案を携えて帰国し、米国の教界関係者に理解と支援を求めたところ、少なからぬ反響があった。

中でも、日本で活動した経緯もあるバプテスト派の女性宣教師のG・F・タッピング（Genevieve Faville Topping）が、伴侶のヘンリー（Henry Topping）とともに並々ならぬ共感を示して、即座に、在米の賀川後援会を結成している。彼女は、二七年五月に来日し、八月一一日に軽井沢で百万人救霊運動協議会が開催されるに及んで、全国的な伝道の気運が盛り上がることになった。この協議会には、五五名の出席者があったというが、その中には、山室軍平、安部磯雄、田川大吉郎、柏木義円、小崎道雄、杉山元治郎といった人たちがいた。

(65) 同志社における堀貞一の伝道は、一九二七年一月九日の同志社教会での礼拝から翌二月六日までの長期に及ぶものであったが、この間、一月二五日から二七日には、梅花女子専門学校での講演にも赴くといった過密なスケジュールであった。この時の模様は、菅井益郎『堀貞一先生』（基督教書類会社、一九四四年）が伝えている（同書、一六四―一九四頁）。後に中島は、堀の信仰理解をめぐって、次のよう振り返っている。「先生は、自己を棄て、神と一つになって行つた。それが先生の伝道の秘訣である。そこに否定面と肯定面と両面がある。神を負うて社会に突っ込んで行く。それは恰も、贖罪愛の実践であるといふことになつて居る」（前出、『同志社教会　一九〇一―一九四五』二三五頁）。

(66) 「早天祈祷会」『同志社時報』第二四五号、一九二七年三月一五日、二頁。また、参会後に、同志社中学の学生たちは、別に残って、「我等同志社中学の者茲に結束して同志社精神に活き、学内に於ける気風革新と奉仕献身の第一歩を踏み出ださんとす」との文面の盟約をなしている。

(67) 「新島先生記念礼拝」前出、『同志社時報』第二四五号、二頁。

(68) 『同志社九十年小史』学校法人同志社、一九六五年、五九四―五九五頁。

(69) 『梅花学園百十年史』学校法人梅花学園、一九八八年、一四三―一四五頁。

(70) 賀川「武庫川のほとりより」『雲の柱』第六巻第四号、一九二七年四月、前出、『賀川豊彦全集』第二四巻、七九頁。

(71) 堀貞一は、この年の一一月に同志社教会の第一〇代牧師、及び同志社の宗教主任として就任することになるが、彼の招聘に当たって、同志社教会の執事でもあった中島は、次のような文面の書簡を、堀に認めている。「（前略）私は此の五六年来職掌柄社会問題に心を潜め研究して参りました結果今迄の基督教には到底此の大問題は解決出来ない事を痛感してゐました。それで秘かに方向転換して自己改造の必要を感じてゐたのです。其の中心を強く惹いたのは賀川氏の傾向でした、それに触れて稍人々自己改造の曙光を見出しました、其の後其の方向に兎に角進しやうと苦闘してゐるんですが時しも先生の宗教に触れて私の此の方向の心持ちが徹底することができました、もう後すざりは出来ないと思つてゐます。今後は唯此の学的説明のみ残つてゐるのです、西洋の基督教は此の個人主義で行き詰つてゐます、之れを打開するには東洋の超

個人的要素を加味する必要があります、先生の全体に東洋的なるものの育る事は此の上なき貴い事に思ひます、東洋から西洋を救ふ新らしい基督教が出るのではないかと思ひます、私の基督教は社会的基督教です（後略）」（傍点引用者、前出、菅井益郎『堀貞一先生』二〇二―二〇三頁）。ここで、中島が、自分のキリスト教を「社会的キリスト教」であると披瀝していることに注目したい。

(72) 前出、『同志社教会―一九〇一～一九四五』二三二頁。

(73) 賀川「武庫川のほとりより」『雲の柱』第六巻第一二号、一九二七年一二月、前出、『賀川豊彦全集』第二四巻、九〇頁。なお、イエスの友会京都支部は、この前年の二七年七月より、「京都市内基督教教化運動」の一環として、市内の会員の自宅を解放して「家の教会」を設立している。たとえば、七月四日に誕生した斉藤新吾の「家の教会」では、「熊野労働街にて同人一団となつて路傍伝道」をしたり、少年団の集会がもたれたりしている（「イエスの友会京都支部」『基督教世界』第二二七一号、一九二七年七月一四日、六頁）。また、こうした動きは、大阪でも生まれた。ここ年の一一月に賀川は、大阪の教会教職者たちとともに大阪教化同志会を結成して「家の教会運動」を始めている（賀川「武庫川のほとりにて」一九二七年一二月、前出、『賀川豊彦全集』第二四巻、七三頁）。

(74) 賀川「武庫川のほとりより」『雲の柱』第七巻第一号、一九二八年一月、前出、『賀川豊彦全集』第二四巻、九一―九二頁。

(75) 佐藤健男「日本に於ける社会的基督教運動の発展」『社会的基督教』第三巻第一号、一九三四年一月、一〇頁。

(76) 「同志社労働者ミッションの設立」『基督教世界』第二二九八号、一九二八年一月二六日、六頁。

(77) 賀川『基督教社会主義論』新潮社、一九二七年、『賀川豊彦全集』第一〇巻、キリスト新聞社、一九六四年、二五三頁。

(78) 「同志社に生まれた労働者ミッション―新使命に輝く若き学徒」『火の柱』第一八号、一九二八年四月一日、六頁。

(79) この時の講義は、賀川や中島を別にして、次のようなものであった。杉山元治郎「理想主義と社会運動」、吉田源治郎「兄弟愛運動史としてのキリスト教史」、大塚節治「宗教本質を論じて教会に及ぶ」、河上丈太郎「社会運動と余の信仰観」、山谷省吾「イエスの福音における社会的要素」、升崎外彦「農民工芸と農民伝道」、米沢尚三「キリスト教の新見解」（『同志社百年史（通史編二）』学校法人同志社、一九七九、一〇七一―一〇七二頁）。

(80) 中島は、翌二九年七月二六日から開催されたイエスの友会の第七回夏期修養会にも、岩橋武夫、田川大吉郎らとともに、外来講師として招かれている（「イエスの友会夏期修養会及び全国大会」『雲の柱』第一〇号、一九九一年一〇月、四八―四九頁）。

(81) 岩井文男「同志社労働ミッション並びに日本労働者ミッション創立前後」新島文化研究所編『敬虔なるリベラリスト―岩

井文男の思想と生涯』新教出版社、一九八四年、九三―九五頁。

(82) 前出、中島重『社会的基督教概論』四―六頁。

(83) 「社会的基督教の運動の沿革」『社会的基督教』第五巻第九号、一九三六年九月、二二頁。

(84) 前出、佐藤健男「日本に於ける社会的基督教運動の発展」一一頁。

(85) 中島は、この時期に、『基督教世界』にキリスト者の「社会奉仕」について力説する文章を寄稿している。たとえば、二七年一一月の同紙の「奉仕と社会化愛」という一文では、「社会化愛は、社会と天地とを貫く神の御働きである。之あるが為に、非社会的なる罪人は化せられて社会的人格となる。社会の結合力の根本は、此の社会化愛」であると述べて、この社会には多くの権力関係があるが、「イエスの精神は神の社会化愛に依つて、此の権力関係を変じて協力関係とし、此の人類社会及び此の天地に神の御姿を現はすこと、換言すれば神の社会（神の国）を実現するにあつた」と述べている（同紙、第二二八号、一九二七年一一月一〇日、三頁）。また、また、この前年の二六年三月の彼の講演筆記の記事では、彼は、「奉仕と協力の宗教的否基督教的基本」として、「社会に神を見出し、神に奉仕する心を以て社会に仕ふる、これ奉仕の基本精神である」と語っている（中島「協力と奉仕の宗教的基礎」同紙、第二二〇三号、一九二六年三月一八日、二頁）。また彼は、同志社における自分達の「新しき宗教運動」を「第二同志社運動」と呼んで、次のように述べている。「私共の体験せんとする所は純粋にイエスそのもの、宗教であつて、イエスそのもの、宗教は最も深い意味に於て社会的クリスト教であつたと思ふ。（中略）この精神が基礎になるものとすれば、同志社は今までの同志社とは非常に違つたものとならなければならず、且なる筈だと思ふ。私は懐いて居るヴィジョンは将来の同志社をして兄弟愛と奉仕と協力との訓練の道場としたいと言ふことである。（中略）私は最も深い意味に於て、今後の同志社は社会化されねばならぬる思ふ」（中島「第二同志社運動に就いて」『同志社新聞』第七号、一九二七年三月一二日、一頁）。

(86) 大阪汎愛教会の設立は、一九二八年九月に大阪イエスの友会の有志が、大阪市生野にあった大阪汎愛扶植会幼稚園舎に賀川を招いて宗教講演会を開いたことに始まる。この時、一六〇名の決心者があり、とりあえず、四貫島セツルメントの吉田源次郎が集会の責任をもつことになり、一六名の受洗者が与えられた。そして、翌二九年五月一九日に、賀川が主任牧師となって、教会が創立の運びとなった（正式な名称は「日本基督大阪汎愛伝道教会」）。しかし、その後、賀川が東京に転居することになったので、金田弘義が、賀川の要請を受けて赴任することになった（『大阪生野教会五〇周年小史』日本基督教団大阪生野教会、一九八〇年、五―六頁）。

(87) 石田については、竹中正夫『土に祈る―耕牧石田英雄の生涯』（教文館、一九八五年）が詳しく、岩井の足跡については、

武邦保「『社会的基督教』運動から農村へ」（前出、新島文化研究所編『敬虔なるリベラリスト―岩井文男の思想と生涯』）が辿っている（同書、一三五―一五九頁）。また、中村遥の働きについては、延原正海「中村遥―社会的基督教の愛の実践としての大阪水上隣保館」同志社大学社会福祉学会編『社会福祉の先駆者たち』筒井書房、二〇〇四年、所収、野村篤『懐妊の聖母―ある児童養護施設の記録』亥辰舎、二〇一〇年を参照されたい。

(88) 井上史「一九六〇年代の同志社生協―機関誌『東と西と』を通して」『社会科学』第八一号、二〇〇八年七月、六頁。

(89) この内紛問題については、前出、『同志社百年史（通史編二）』に詳細な叙述がなされている（同書、一〇七二―一〇七八頁）。

(90) 中島重「基督者の聖戦」『日本労働者ミッション』第八号、一九三〇年一月、引用は、前出、「社会的基督教の運動の沿革」二二―二三頁。

(91) 『神戸とＹＭＣＡ』神戸キリスト教青年会、一九八七年、二四二頁。なお、同志社と賀川との結びつきは、その後も続き、時期的には下るが、一九三六年には文学部の客員教授として、さらに、その翌三七年から三九年まで、文学部教授に就任して「協同組合論」の講義を担当している。

(92) (93) (94) 中島「基督教と社会問題」『基督教研究』第四巻第二号、一九二七年三月、二五―二七頁。